サポートブックグループ

支援をスムーズにつなげるためのサポートブック

下野令子　清水雅恵

1．昨年度までの取り組み

平成14年度の本校の研究テーマ「一人一人の『わかる』を大切にした学習活動をめざして」について実践を行う中で、特に自閉性障害のある生徒の理解についてその特性に着目した。「障害からくる生徒の特性」や「個々の理解や認識の仕方」が把握できれば教師側からの効果的な提示の仕方が可能であることを実感する中で、それらの情報を次の学年や進路先につなげることで、よりスムーズな移行が可能なのではないかと考えた。さらに平成15年度からサポートブックを各学部で作成することになり、これらの情報をサポートブックにつなげていくこととした。

平成14年度の終わり頃から教務課が中心となってサポートブックのひな形を作成しつつあったが、15年度に入ると小学部及び中学部では、保護者が「サポートブック作成教室」を立ち上げて活動を始めることになった。しかし、高等部では保護者が作成教室に参加しなかったため、研究の自立活動グループの中でサポートブックを作成することにした。小学部及び中学部の保護者が作ったサポートブックは記述式であったが、高等部では教師の方で項目を作成し保護者に記入してもらう埋め込み式をとった結果、本校の中で２つの形式でのサポートブックをもつに至った。

実際の使用については、教育実習や産業現場等における実習（以下、現場実習）及び支援費制度を使った各種サービスの利用の際に、実習生や施設指導員や支援者に手渡して見てもらうようにした。実習生や支援者からの評価は、記述式でも埋め込み式でも大きな差は認められなかった。しかし、持たせる側としての保護者の評価は、埋め込み式に対しては「実態が書き切れていない」「実際に使おうとは思わない」と低かった。さらに、保護者の作成するサポートブックは随時手直しが可能であるのに比べて、教師が作ったものは量的、時間的にも見直していくことが難しいという問題点もあった。そこで平成16年度以降は、中学部からの進学者で保護者が作成したサポートブックがある生徒については、高等部では改めて作成しないことにした。保護者が作成しなかった生徒や他校から入学してきた生徒については、従来の埋め込み式のサポートブックを作成することにした。

2．現場実習用サポートブック作成までの経緯

今年度高等部で作成する場合には、どのようなサポートブックの展開が可能かを考えた。平成15年度に作成したサポートブックで保護者の方がよく書けていた項目は、「個人ファイル」「食事」「宿泊」であった。反対にアンケートで「書きにくい」「分からない」という回答があった項目は、「作業能力」「見通し」「仕事について」であった。また、保護者と教師のとらえ方が違った項目は、「コミュニケーション」「パニック」であった。その理由として、家庭と学校集団といった場面や状況及び人によって対応する際の手だてが違うことなどの要因が考えられた。さらに、保護者の書いたサポートブックは、自由に過ごす状況やガイドヘルパーなどと短時間遊びに行くのには向いているが、現場実習などのもう

一歩進んだ支援や対応の仕方などの情報が必要なときに不充分な点があるのではないかと思われた。

以上のことから、今年度サポートブックグループでは「現場実習用サポートブック」を作成することにした。

3.「現場実習用サポートブック」の作成について

（1）作成対象の生徒と作成者

対象生徒：高等部2年生（9名)、高等部3年生（9名）の生徒全員

作成及び記入者：研究グループの各学年の担任教師　清水（2年)、下野（3年）

（2）形式

ポストカードホルダーをケースにし、ハガキの大きさの用紙を使用する。1ページにつき大項目を1つ入れることとし、必要に応じて大項目を選択したり、重要だと思われる大項目の順に並び替えたりすることにする。

（3）項目（大項目と小項目）

1学期に、昨年度のサポートブックの項目を参考にして大項目の検討をして原案を作成した。この中から必要な大項目を選び出し、その中に小項目を作って記入していくことにした。具体的な項目については、最後に資料として掲載した（資料1）。

（4）記入にあたって

必要な時に手直しが簡単にできるように、パソコンで作成することにした。小項目ごとに記述式で、生徒の実態とともに配慮していることや手だてを記入した。特に注目してほしい部分は、色を変えるようにした。

記入にあたっては、昨年度保護者に埋め込み式で記入してもらったサポートブックがとても参考になった。たとえば、「食事の好き嫌い」や「休日の過ごし方」などに関しては、保護者からの情報の提供は不可欠であることを実感した。

4．作成から見えてきた傾向

生徒によってどの大項目について記入したかを一覧表にして、障害別や学習グループ別、就労先別で傾向を調べることにした（表1）。

作成はそれぞれ学年ごとに行ったが、清水は大項目に沿って記入していったのに対して、下野は生徒によって大項目を付け加えていったという違いがあった。その結果、たとえば「こだわりや癖」の大項目に見られるように、2年生に関しては該当者がいないように見える表記になった。これは2年生に「こだわりや癖」がある生徒がいないというわけではなく、該当する大項目を他の大項目の中に小項目を作って記述しているためである。さらに、「こだわり」や「癖」など質的に違う項目を同時に1項目としたり、2、3年のデータを集めても18例と少なかったりと資料として充分ではない部分もある。しかし、おおよその傾向が見られたので、以下に記した。サポートブックは個に応じて作成するものであり、その前提に立った上での傾向として読んでいただきたい。

（1）障害別の傾向

対象生徒18人のうち13人に自閉性障害や自閉的傾向（以下、自閉性障害）があるため、自閉性障害とその他の障害で比較を行った。自閉性障害の生徒13人中11人に「障害からくる本人の特性」の大項目の記入が見られ、残りの2人に「こだわりや癖」「パニックや困ったときの対処の仕方」の大項目の記入が見られる。対してその他の障害の生徒は5人であ

表１　生徒別の大項目の記入状況

	イニシャル・学年	Y2	N2	K2	T2	A2	D2	M2	B2	C2	O3	S3	U3	H3	E3	R3	F3	G3	J3
生徒	障害別（自閉◎／自閉傾向○）			○	◎	◎	◎	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○			
	学習グループ	1	2	2	2	3	4	4	4	4	1	1	3	4	4	4	1	2	4
	就労先（一般就労○）									○						○			
大項目	個人ファイル	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	食事	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	作業能力（作業学習での様子）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	対人関係	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	余暇利用	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	健康	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	身辺自立	○	○	○	○		○				○	○	○	○	○		○	○	○
	社会性		○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○		○	○
	学力（生活場面における理解）		○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○	○
	障害からくる本人の特性		○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○			
	こだわりや癖										○	○	○				○		
	パニックや困ったときの対処の仕方				○		○					○	○						
	その他															○		○	○

り、そのうち１人には「こだわりや癖」の中の「癖」の小項目に記述があった。またもう１人には、「障害からくる本人の特性」でてんかん発作に対する対処法などについて記述があった。以上のことから、自閉性障害以外の生徒には、自閉性障害の生徒の特性である「こだわり」「パニック」の項目は必要としないことがほとんどであるという傾向が読み取れる。

（２）学習グループ別の傾向

本校では国語や数学などの教科学習は、習熟度が最も高い集団を４グループとして以下３、２、１と続く４つのグループを編成して行っている。

１グループの生徒に関しては、「学力」や「社会性」について記述することができなかった。それは、「学力」の小項目（読み書き、計算、数概念など）では、「～できない」という表記の羅列になると思われたためである。サポートブックは「何ができないか」を伝えるのではなく、「どんな手だてがあれば活動に参加できるか」ということを相手に伝えて支援してもらうためのものである。さらに、１グループの生徒の課題は日常生活にあり、実習先も更生施設が主になることから必要性があまりない大項目だと考えられる。「社会性」についても同じことがいえるが、「対人関係」の中のコミュニケーションの小項目などで補うことができたと考えている。

４グループに関しては、８人中７人までが自閉性障害のある生徒であるが、「こだわりや癖」や「パニックや困ったときの対処の仕方」という大項目の記入は１人だけだった。理解力が高いと、「障害からくる本人の特性」の小項目の「配慮していること」などで記述できることが多かった。

（３）一般就労を希望する生徒の傾向

今年度の２年生及び３年生の生徒の中で、一般就労を希望しているのは２人でどちらも

4グループに入っている。この2人に関して「身辺自立」の大項目の記述はなかった。身辺自立に課題があったり何らかの配慮が必要だったりする知的障害の生徒の場合は、福祉就労の方が適切な場合が多いためだと思われる。

一般就労の希望者については、福祉就労に比べて周囲の人が障害者と接する機会が少ないため、どうしても記述が多くかつ細かくなりがちであった。「こう支援すると仕事の場で本人が生きますよ」という方向性を示したかったためである。特に「障害からくる本人の特性」については、障害をマイナス面と捉えられるかもしれないという心配から表現の仕方に配慮した。2年生のC男には、「予告なしに就業時間が伸びると、仕事があっても止めてその場から飛び出すことがある」という行動が見られる。しかし、適切な対応（あらかじめ就業時間の変化を伝えておくこと）をすれば、本人は納得して不安定にならずに済むので「パニックや困ったときの対処の仕方」の大項目を作らなかった。これは、記入者側にこの大項目自体を悪い方にとってもらうと困るといった気持ちがあったことは否めない。

また、3年生のサポートブックは、1学期の現場実習を念頭に置いてそのまま仕事へ移行できるような具体的な記述とした。2年生のものは、実習先でよりスムーズに1週間の実習をしてほしいという気持ちで記述しているので、3年生に比べて簡潔なものとなった。

5．アンケート分析

昨年度の結果と比較検討するために、アンケートは富山大学教育学部の武藏博文助教授が使用したものと同じ質問項目（問2以外）にした。アンケートは、現場実習先に記入をお願いして実習終了後に回収した。有効回答数は17（1人の生徒につき複数の回答あり）で、各質問項目は5段階評価とした。アンケートの結果は次のとおりである（表2）。

表2　アンケート結果

質問項目		平均	昨年の平均（参考）
問1	サポートブックは役に立ちましたか？	4.6	4.2
問2	どの項目・情報が役に立ちましたか？	省略	省略
問3	サポートブックの内容は生徒の実態と一致していましたか？	4.1	4
問4	サポートブックの内容は具体的でわかりやすかったですか？	4.6	4.3
問5	サポートブックは読みやすかったですか？	4.3	4.5
問6	サポートブックの情報はどうですか？（情報量に関して）	4.2	3.9
問7	サポートブックにより、生徒への理解が深まりましたか？	4.3	3.6
問8	生徒とかかわる時に、サポートブックは必要だと思いますか？	4.7	4.4
問9	サポートブックに載っていた情報以外で知りたかった情報は何ですか？	省略	省略
問10	その他、サポートブックについてご意見をお聞かせください。	省略	省略

アンケートの回収後、サポートブックを使用した効果がどれくらい見られたのか分析を行った。その結果、問1及び問3から問8の平均値を見るとどの質問項目も5段階評価で4以上であり、おおむね良い評価が得られた。特に評価が高かったのは、問1、問4、問8であり、サポートブックは「具体的でわかりやすい」「役に立つ」「必要である」という

ことがいえるであろう。

問2は役に立った質問項目の複数回答であり、結果は表3のとおりである。いちばん多かったのが「対人関係」次いで「作業能力」で、作業所等で仕事に必要と思われる項目が浮き彫りとなっている。

表3　役に立った大項目
（アンケートの問2より）

質問項目	合計
個人ファイル	6
食事	5
健康	5
学力（生活場面における理解）	7
作業能力	12
対人関係	14
社会性	5
余暇利用	3
障害からくる本人の特性	7
身辺自立	7
こだわりや癖	1
パニックや困ったときの対処の仕方	1

問9の「サポートブック以外で知りたかった情報」については、次のような記述があった。

＜福祉就労施設より＞
・学校内での卒業後に向けた作業活動等の様子
・クラブ活動やクラスなど集団活動の様子
・本人の興味ややってみたいこと、望むこと
・体調や病歴、服用している薬があるか
・家族からの要望や実習前の気持ち
・会話のヒントとしてのおおまかな家族状況など家族のことを少し知りたい
・自傷行為について、もう少し行動の記述があればよかった

＜一般就労希望者のジョブコーチより＞
・家族構成
・名前にフリガナがあるとよかった

また、問10も自由記述で、次のような回答があった。

＜福祉就労施設より＞
・初めて見た取り組みだったが、本当に助かった。今後ともぜひ活用してほしい
・サポートブックを確認後に本人と過ごし、またその後に読み返すことでさらに内容を理解することができたと思う
・サポートブックがあることで、すぐに相手の特性が分かり関わりやすいと思う
・いろいろな場面（作業場、外出時、緊急時、体調を崩したときなど）で活用できそうなので幅広く情報が載っていることは、支援者にとっては助かる
・個人やいろいろなマニュアル作りに参考にさせていただきたい
・学校や家庭での活動の様子を写真で載せてあるとよりわかりやすいかと思う
・「ブック」の形式にする意図は？実習施設としては、資料としてファイルしていける1枚の紙のほうが都合よい

＜一般就労希望者のジョブコーチより＞
・情報は分かるが、それに対して事業所の方への対応のお願いなどがあれば、分けて見やすく記載した方がよいと思う
・「モデリング」などは専門用語になるため、分からない人が見ると思って作成した方がよいと思われる

今年度のアンケート結果を昨年度と比較してみると、全体的に少し評価が高くなっている。サポートブックの記入方法を埋め込み式から記述式にしたことで、よりわかりやすいものになったのではないかと考えられる。ただ、昨年度よりも評価が低かった問5に関しては、記述式となって情報量が増えた分、読みにくいと判断されたのではないかと考える。

6．まとめ

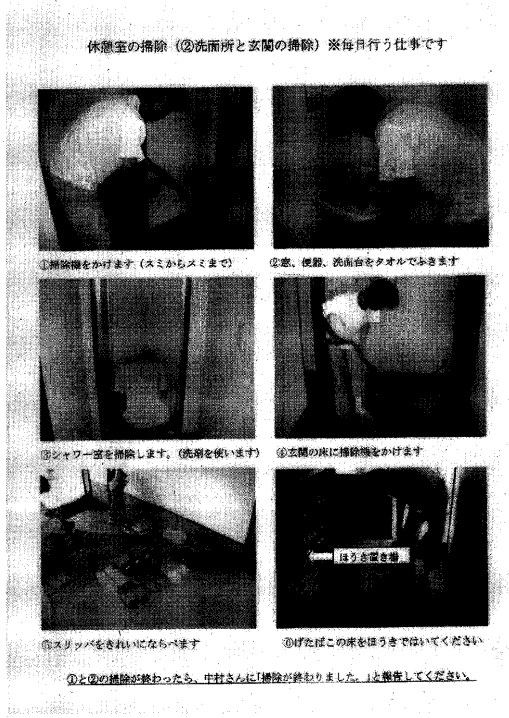
（1）サポートブックの必要性について

サポートブックの利用にあたって、作業所及び生徒によっては「必要を感じない」「実習の際に提出される実態が書かれた用紙１枚の方で十分である」という回答を得た場合もあった。また、「非常に役に立った。作業所の方でも作りたい。」と言われてデータを渡した作業所もあった。必要か不必要かは、各々の生徒の実態や支援者の考え方、実習先や実習の期間などによって違ったが、おおむね「役に立つので、あったら参考になる」と考えられているようである。

自閉性障害のある２年生のＭ子は福祉就労を希望している。コミュニケーションについては本人なりの言い回しが多いものの日常生活ではあまり困ることがない。今回のアンケートの評価が低かったのは、作業所での実習が１週間という短期間であることと、毎日同じ軽作業の繰り返しであるために本人にとって見通しがもちやすかったため、両者にとってそれほど困ることがなかったからではないかと推測している。

また、自閉性障害のある３年生のＲ男は一般就労を希望している。Ｒ男の現場実習の際、打ち合わせで持参したサポートブックが役に立った。実習先では作業に必要な服や履き物を会社で用意するとのことで、その場で「個人ファイル」の中の小項目「服や靴のサイズ」を見せて情報を提供することができた。

生徒によっては、本人をサポートするためのサポートブックの必要性を感じて作成した場合もあった。同じくＲ男が１学期に鉄工所へ現場実習に行った際、金沢市の社会福祉協議会のジョブコーチの支援を受けることができた。あらかじめジョブコーチと教師が１日職場体験をさせてもらって、仕事の流れを写真付きの工程表として作成し本人に持たせた。実際の実習が始まってから加わった休憩所の清掃の仕事についても、本人の写真で工程表を作ることにした（資料２）。Ｒ男自身サポートブックで確認しながら、一人で複数の場所や手順がある清掃の仕事を行うことができた。２学期に現場実習で食品加工会社へ行った際は、ジョブコーチの資格をもつ従業員が職場にいたことや、作業種が限られていたため１学期の実習で行ったような支援は必要がなかった。しかし、本人だけでは判断に困る場合を想定して、「休むとき」と「遅刻したとき」に連絡するよう職場と学校の電話番号をカードにして本人に渡しておいた。



資料２　本人支援のためのサポートブック

「サポートブックは個に応じて作成するものである」と前述したが、実習先や支援者によってもまたそれぞれである。実習先が分かっていたり、ある程度想定できたりする場合は、より現場にあった具体的な情報を提供できる。そのためには、実習先にあわせてその都度内容の一部を見直していくのが理想であろう。また、サポートブックは新しい場所や普段障害者に接する機会の少ない支援者に対して、短期のかかわりにおいて必要であると考えている。長期にわたるつき合いになると、それぞれの支援者の接し方に移行していく

ものであるし、またそれが望ましいであろう。生徒があまり混乱することなく、新しい環境で仕事や生活を始めることができるために、その移行をよりスムーズにするものとしてサポートブックの必要性を感じている。

（2）記述式の利点

今年度のアンケート結果による評価が昨年度より上回った要因として、実習用のサポートブックを記述式で記入したことが大きいと思われる。記述式にしたことで、一人一人のより細かい配慮点に言及できた。さらに、障害やその子への支援が必要な部分に関して、「問題点」から「配慮があればよい点」への視点の提案や、「できない子」ではなく「こういった支援があれば可能性をもつ子」という生徒の見方の一つを支援者に示唆できると考える。

また、記述式では簡単なエピソードや教師や保護者の思いなどを書くことができた。それらは情報としては必ずしも必要ではないかもしれないが、支援者に生徒自身をより身近な一人の人間として感じさせることができると考えている。以上のことから、埋め込み式よりも記述式の方が効果的であるということができる。

（3）保護者との協力

サポートブックで取り扱うのは個人情報であり、内容によってはプライベートに抵触しかねない。そのチェック機能として、保護者に内容を確認してもらうことは不可欠であると考えている。

現場実習用のサポートブックを作成した後、保護者に見てもらい、内容や記述の仕方のチェック及び不足している情報についての加筆をお願いした。そのため、記入する教師側も前述した支援者への「視点の提案」や「生徒の見方の一つの示唆」に結果的につながる書き方を心がけることができた。また、保護者に見てもらったり加筆してもらったりすることで、保護者の「子どもについてこのことは伝えたい、知っておいてほしい」という気持ちを表す機会となったと思われる。

サポートブックを読んだ後の連絡帳に「我が子の知らない一面を知った」という感想を書いてきた保護者もいた。教師も、生徒の嗜好や休日の過ごし方など初めて知ったこともあった。サポートブック作成の過程で、生徒を通して保護者と教師の相互理解が深まったということもあった。

7．おわりに

本校のサポートブックは2年目を迎えた。サポートブックが、本人や保護者の背中を押して家庭や学校から外に出て、いろいろな人と様々な活動をしたり地域社会に働きかけたりする一助となれば、その目的は充分達成されると考えている。

なお、サポートブックの研究を進めるにあたって、富山大学教育学部武藏博文助教授のサポートブック作成教室のアンケートを使用させていただきました。ここに深く感謝いたします。

資料１　サポートブック（原寸は１ページがハガキ大）

サポートブック **（現場実習用）** （顔写真） **附属 花子** 学校名：金沢大学教育学部附属養護学校 高等部 住　所：金沢市東兼六町２番１０号 連絡先：０７６－２６３－５５５１	個人ファイル 名　前： 住　所： 連絡先 自宅　０７６－　　－ 学校　０７６－２６３－５５５１ 携帯（　）　　－　　－ ジョブコーチ 生年月日：昭和　　年　　月　　日 血液型：　　型 身　　長：　　ｃｍ 靴のサイズ：　　ｃｍ 服のサイズ：ウェスト　　ｃｍ 上着のサイズ 療育手帳：	食　事 好きな食べ物 嫌いな食べ物 学校（給食）での様子 外食について<もしくは> 外食した時に無理なく(よく)食べるもの 購入について 配慮していること その他 ・食べ方 ・こんなことがあります　など
健　康 病名や注意点（てんかん、体温調節　など） 身体上の留意点 服薬について 健康状態 体力 配慮していること	学　力 読み書き 計算 数概念（数） マッチング 時計 配慮していること	作業能力 作業態度 理解 持続性 技術 質問・報告 指示の出し方 配慮していること
身辺自立 衣服の着脱 排泄 歯磨き 家の手伝い、家でしていること	生活場面における理解 （学力について書きにくい生徒用） 日常生活上の指示について 時間や予定に対する見通し 配慮していること	作業学習での様子 （作業能力について書きにくい生徒用） 作業の様子 配慮していること
対人関係 挨拶 コミュニケーション 身体接触 好きなタイプ 配慮していること	社会性 衛生 金銭の扱い、買い物 交通機関の利用（通勤方法） 最寄りのバス停	余暇利用 好きな活動 特技 学校での休み時間の過ごし方 課外活動 職場での休み時間の過ごし方 休日の過ごし方
障害からくる本人の特性 嫌がることなど 原因 前兆 不適応行動（パニック） 様子 対処法 配慮していること	こだわりや癖 こだわり 接し方や対応の仕方 癖 接し方・対応 配慮していること	パニックや困ったときの対処の仕方 原因（いやがることなど） 不適応行動 パニック 対処の仕方 配慮していること